2014年03月03日 中日新聞 朝刊 17頁

古里の未来 新聞に託す

河北新報釜石支局
玉応雅史（たまおう）記者

昨年十二月、一枚のはがきが支局に届いた。差出人は取材で知り合った前川慧（さと）さん（さと）。岩手県釜石市鵜住居町の自宅を津波で失い、市内の仮設住宅で暮らしていた。同県宮古市に住む娘夫婦宅のそばに新居を構え、妻（きよ）と二人で生活を始めたと記されていた。

年が明け前川さんに電話した。「まだ仮設にいる人を思うと心苦しい」。古里に背を向けたような思いを抱える前川さんの胸の内に触れ、一落ち着けて良かったですね」と軽々しく励ましたことを恥じた。

釜石生まれの前川さんは最初、四十五年住み慣れた鵜住居での自宅再建を考えた。土地区画整理事業は昨年十一月、工事が本格的に始まった。住宅再建にはあと二一四年かかる。

「八十歳では自宅再建のめどが立たない。残りの人生を娘や孫のそばで暮らすのがいいかも」。苦渋の決断のようだ。

やむなく古里を離れる人がいる一方、地元にとどまり「いつかは戻って来て」と願う人たちもいる。

住民団体「鵜住居地区復興まちづくり協議会」と「地権者連絡会」は昨年一月、「鵜住居復興新聞」を発刊した。復興事業の解説、提言、復活した祭りの紹介…。A4判十数ページの冊子に鵜住居の「今」があぶられる。先月発行で第九号になった。

編集担当の佐々木一正さん（さと）は「復興に向け住民の力を結集するには、情報の共有が欠かせない」と言う。佐々木さんも自宅を失い、みなし仮設で暮らす被災者の一人だ。

部数は約千六百部。岩手県内をはじめ北海道から福岡県まで約千世帯に郵送。鵜住居の被災していない約六百世帯にも配り、地域のつながりを保とうと懸命だ。

鵜住居には、防災教育を受けた小中学生が率先避難し助かった「奇跡」と、避難した大勢の住民が犠牲になった地区防災センターの「悲劇」があった。

悲しみと称賛、怒り、悔しさ、後悔…。震災から二年になろうとする今も光と影の複雑な思いが地域を覆う。そんな中、復興新聞は住民が心を一つにして、古里の未来を築こうと前を向く意思の表れでもある。

「戻れないなら孫子の代でもいい。鵜住居を忘れないで」。新聞に込められた地元のみなさん（さと）は、復興に向け住民の力を携して市内の農産物などの放射性物質検査を実施している。結果はホームページで公表しており、ほぼ全てが検出下限値未満だ。安全性は理解されるはずと思うが、風評は根雪のように残る。

県を挙げて取り組んでいる風評払拭の取り組みが逆効果になるとの指摘もある。「県外では原発事故を忘れている人もいない気持ちだった」と市の担当者は振り返る。

市は農林水産部内に「見せる課」を設け、JAいわき市と連携して市内の農産物などの放射性物質検査を実施している。

「報道が風評を助長している」との指摘をしばしば受ける。原発の現状を可能な限り詳しく報道し、未曾有の災害を忘れさせないことは地元紙の責務だ。

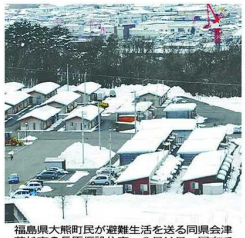
「風評」と「風化」。二つの風にいかに向き合うか。手探りの日々が続いている。

風評の根深さを感じる出来事は枚挙にいとまがない。昨年三月、福島第一原発の使用済み核燃料プールで配電盤がネズミによってショートし、停電するトラブルが起きた。環境に影響はなかったが、市内の食品業者は県外のスーパーから取引中止を通告された。原発からの汚染水漏えい問題が発覚した直後は、家族連れを中心に予約のキャンセルが相次いだ宿泊施設があった。

首都圏の量販店で行われた市

「風評」と「風化」戦い続く

福島民報いわき支社
報道部
五十嵐稔部長



福島県大熊町民が避難生活を送る同県会津若松市の長原仮設住宅＝2月11日、同市で

東日本大震災から間もなく三年。この間、東北地方のブロック紙・河北新報（本社・仙台市）は津波の被害や検証報道を続けてきた。福島県の地元紙・福島民報は原発事故に向き合い、県民に寄り添うニュースを伝えている。中日新聞と東京新聞（中日新聞東京本社）は原発の問題点を指摘し、報道や防災・減災を呼びかける報道に努めてきた。各紙の記者が、震災三年の節目に思いを伝える。

全て奪った原発事故

東京新聞
さいたま支局
増田紗苗記者

教室で寝泊まりをしていた福島県双葉町民＝埼玉県加須市の旧騎西高校で

誰もいなくなった校舎に冷たい北風が吹き付けている。昨年十二月末、埼玉県加須市の旧騎西高校。原発事故後、一時は千四百人の避難所に最後まで残っていた五人が退去した。

故郷から約二百キロ離れた埼玉への「集団疎開」は二〇一一年三月末に始まり、町の役場機能も移ってきた。プライバシーがほぼない教室で複数の家族が暮らす生活だが、校舎は故郷に代わるコミュニティーとしても機能していた。

町民は各教室で班長を決め、ごみ出しや清掃を分担した。子どもは近くの学校に通い、大人は不安を口にしつつ励まし合った。校庭では夏祭りも開かれ、やぐらを囲んで「双葉音頭」を踊った。みんな晴れやかな顔だった。そこには「双葉町」があった。

一方、福島県内に仮設住宅が造られると、校舎を離れる町民が増えた。昨年六月には町役場機能も福島県いわき市に移転。町は学校ではない」として退去を求めた。町民がいなくなった今、仮設風呂の解体工事などが進められている。

「交流拠点がなくなってしまった」。家族三人で隣の羽生市に引っ越した柚原秀康さん（さと）が嘆く。柚原さんは今も二日に一度は同校に立ち寄る。「誰もいないのは分かっている。でも誰か来てないかと、つい足を運んでしまう。今の住まいで近所の人は優しくしてくれるが、なかなかなじめない」。加須市内のアパートに移った男性（さと）も「一人でいると不安になる」と漏らす。

六千八百人の双葉町民は、今も三千九都道府県に散らばったまま。埼玉県には約九百人が暮らす。

町は「古里への帰還」を最終目標に掲げて町民の結束を図ろうとしているが、「生きているうちは戻れない」と諦める声も何人から聞いた。町面積の96％は年間被ばく放射線量が五〇ミリシーベルト超えの「帰還困難区域」。町と国が昨年十月に行った調査で将来の帰還の意向を尋ねたところ、八割が「戻らない」「まだ判断がつかない」と回答した。

避難先で定職に就き、地域に根付こうと必死な人たちもいる。避難先で生まれた子もいる。いつか双葉町に住める日が来たとき、その子たちが「双葉で暮らしたい」と思うだろうか。

原発事故は郷土もコミュニティーも破壊した。これほどの犠牲を払いながら原発の再稼働を認めることは、全国の原発避難者たちの存在を忘れ去ることにほかならない。

災害前こそ書かねば

中日新聞社会部
平岩勇司デスク

義姉が流された自宅跡に立ち尽くす女性。背後は津波から逃げた山＝宮城県南三陸町で

二〇一一年三月十一日、宮城県南三陸町の七十歳の女性は、自宅庭で強い揺れに襲われた。

「姉さん、津波が来んべ。早く起きて」

認知症で足腰が不自由な義姉＝当時（さと）＝を連れて逃げようとしたが、一人ではとても無理だった。「助けてけろ！」と叫んでも、手助けする人はいない。

「姉さん、悪いね」

子どものころから津波が来たら「てんでんこ」と教わってきた女性は、はだし外へ飛び出した。振り返ると、義姉が顔をしかめてこちらを見つめていた。翌日、義姉はベッドの脇で遺体で見つかった。

これは一一年十一月の「備える」で伝えた記事だ。今回の震災では、家族や知人を助けようとして共に犠牲になった方も多い。女性の選択を責める人はいないだろう。ただ、本紙記者が現地で取材した当時も、女性は「命ほしいと思ったべ。でも、割り切れねえ」と、無念さと自責の念にさいなまれていた。

担当デスクの私も原稿を読むのがつらかった。「顔をしかめて見つめていた」お姉さんの表情が浮かんでくるようだった。「次に来る震災に備えるため、役に立つなら」と話してくれた女性に感謝し、読者に伝えないだろう。ただ、本紙記者が現地で取材した当時も、女性は「命ほしいと思ったべ。でも、割り切れねえ」と、無念さと自責の念にさいなまれていた。

担当デスクの私も原稿を読むのがつらかった。「顔をしかめて見つめていた」お姉さんの表情が浮かんでくるようだった。「次に来る震災に備えるため、役に立つなら」と話してくれた女性に感謝し、読者に伝えます？」と。

「備える」は、いずれ起きる南海トラフ地震への準備を呼びかける紙面に努めてきた。「災害が起きた後に素晴らしい記事を書いても、犠牲者は帰ってこない。災害前にこそ書くべきだ」。NHK記者時代に阪神大震災を取材し、現在は防災研究者の隈本邦彦名古屋大客員教授の言葉だ。その思いで震災の現実を伝え、対策も提案してきた。

大災害時、行政や消防などの「公助」は期待できない。南三陸町の女性のような老介護の場合、一人の力で動かせるリヤカーを用意するなど「自助」の方法を考えておく。町内会で話し合い、住民間で誰が誰を助けるか役割を決め、避難訓練を繰り返す「共助」の方法も検討する。

そうした日頃の「備え」こそが、共に犠牲に遭う悲劇も、つらい選択で心に傷を負う悲劇も回避する最善の方法。それが、一万八千人を超える犠牲者が教えてくれた戒めと信じ、今後も伝えていきたい。

「備える」は毎月第1、第3月曜日掲載。次回は17日です。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています